

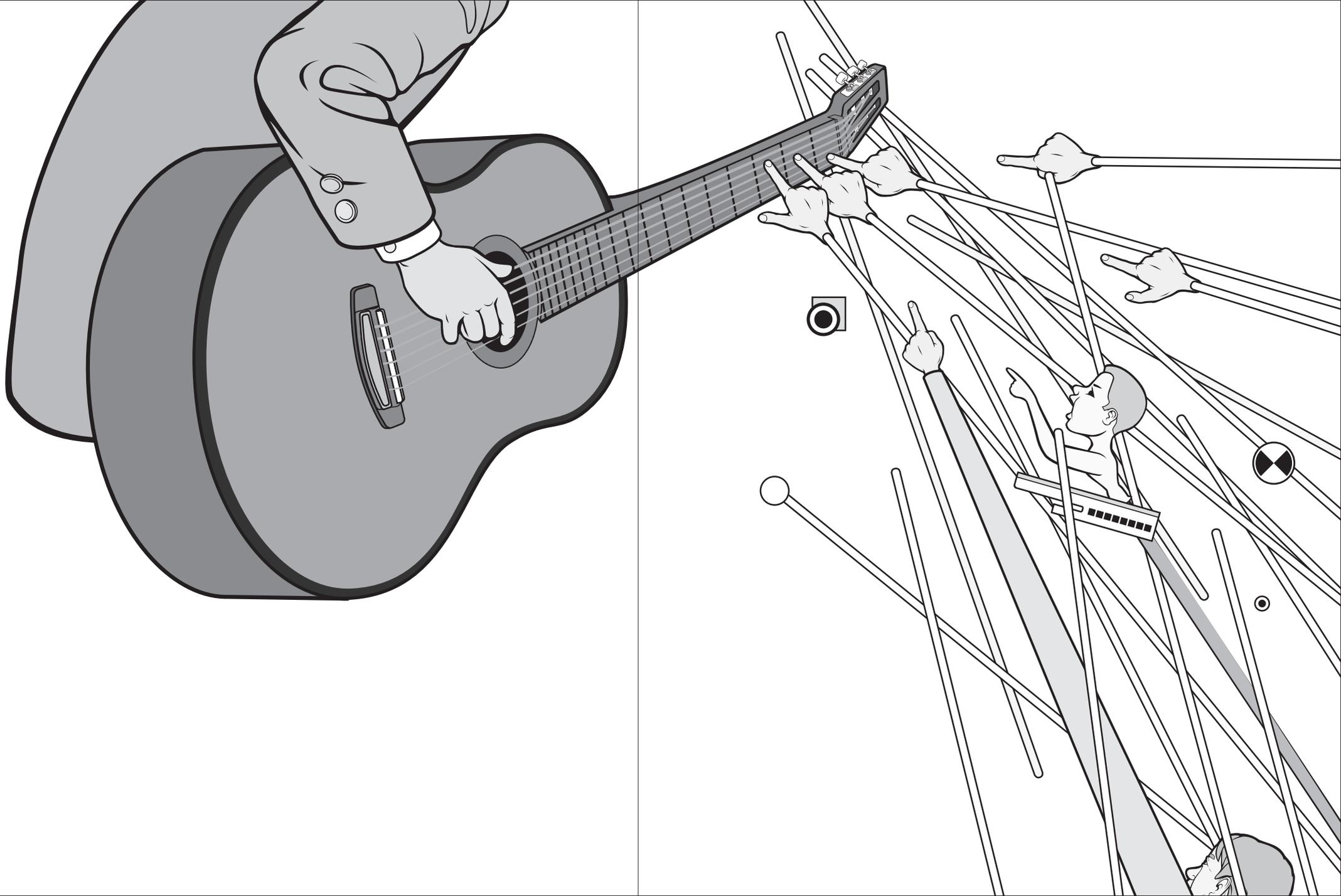
## 目次

天職とはなんだ……………	10
なぜ日本人の名前は優れているか……………	16
わたしはこんな死者になりたい……………	20
気まずい沈黙……………	24
男余りは悲劇か……………	30
柿右衛門は常識か……………	34
カタカナ言葉はよいか……………	38
専門学校教師の限界……………	44
それでも日本人か……………	48
根拠がなくても自信を持つとう……………	52
「モチ」を駆逐せよ……………	56
怒りのブドウ球菌……………	60
関西人は正しく理解されているか……………	66

わだばタルコフスキーになる……………	72
ア段者……………	76
言い訳はみつともないか……………	80
不朽の名作は観ておこう……………	86
機械音痴のデジタルアーティスト……………	90
言葉の威力……………	94
電話と気配り……………	100
自尊心は諸刃の剣か……………	104
誤解されたっていいじゃないか……………	108
アーティストは芸術家か……………	112
名言を作る……………	118
平気な人たち……………	122
他人の立場……………	136
ウツは素晴らしい……………	140
名状しがたい表現……………	144
敬語はどうか……………	148
貧乏の世界……………	154
苦痛の少ない人生を……………	158
現代の逮捕……………	164
社交辞令……………	168
上を向いて歩こう……………	174
敬称はどうか……………	178

ヘタであること	182
男と女の間にある河は	188
消極的自殺	192
HOGAN BEEKY	198
めちやくちやはよいか	204
ソーシャルネットワーキング・サイトの最期	208
無常は美しいか	216
UNDOのできない表現	222
嫉妬	226
当たり障りのある話題	232
超常現象は風流か	236
感動するとはどういうことか	242
坊主憎んで袈裟まで憎むな	246
未練	252
できないものはできないのが芸術家だ	256
ブルーマンデー	260
続・ソーシャルネットワーキング・サイトの最期	264

●ハ長調の位置（次ページのイラストレーション）  
ハ長調ほど魅力的な和音はない。ニ長調よりも優雅で、ト長調よりも官能的だが、イ長調よりも懐疑的で、マ長調の軽快さとラ長調の重量感を併せもっている。また、短調においてもハ調は独特だ。ン短調にもギャ短調にもない、冷徹な響きをもっている。



## 天職とはなんだ

はばかりながら、私自身の体験を述べさせていただく。しかし決してサクセスストーリーではない。なぜなら今に至るも、アーティストとしては無名だからである。試しに、将棋駒の生産で有名な山形県天童市にお住まいの北川タツさん（八二）に「永吉克之ってご存じですか？」と尋ねてみていただきたい。もし「ああ、永吉克之、知ってるだ」と答えたら、それはボケておられるのである。

四十歳になって（現在四十九歳）作品のスタイルを変えてから、急にコンテストでの入選入賞率が高くなって、高額賞金だの、外国旅行だの、いい思いをさせてもらい、「画歴」と呼べるものができたが、それ以前は画歴というより瓦礫と呼んだ方がふさわしい有様だった。コンテストに応募するようになったのが三十歳過ぎてからというものもあるが、入選二回、入賞一回、落選十回。戦績は3勝10敗であった。

十代や二十代ならともかく、三十代半ばでこの戦績では、普通、自分の才能を疑い始めるものだが、私も例に漏れず、三十六歳の時に、浮沈を賭けて応募した作品の落



選通知を見た時「……もはやこれまでか。アーティストなんて志した俺の目論見違っていた。この人生は失敗だ。これからは夢など持たず、残された人生を粛々と消費していこう。どうせ結婚なんかできないだろうから、七十歳くらいになったら、木造モルタルの安アパートで、家賃滞納のまま孤独死してやろう」といったビジョンが活きと眼前に展開した。

とはいっても、孤独死までにはまだ三十年以上あったので、それまでやってきた週三日のデッサン講師を辞めて、フルタイムの仕事を探した。業種は何でもよかった。ピンサロでも、造船会社でも、タレント事務所でも、全日本闘犬協会でも、ポル・ポト派でもどこでも行くつもりだった。

どうせ俺の人生は終わったんだ、犯罪組織以外ならどこでもいいやと思っていたが、結局、友人の紹介で建築設計事務所サラリーマンをやることになった。そこでは建設物から印刷物まで、よろずデザインをやっていたので、幸か不幸か「ヴィジュアル」とは縁が切れなかった。

しかし、もうすでに平成大不況に突入していて、三十六歳にして月収十五万。家賃が六万だったから、妻子がいなくてホントによかったと、あのときほど痛感したことはない。女に縁がないのが幸いすることもあるんだナ、と因果の妙に感嘆したものだ。また、生まれて初めて公務員が羨ましく思えた。

その後この会社はコケるのだが、その直前にここの関連会社で、CGで建造物のシミュレーション画像などを作っている会社に移り、初めてコンピュータで仕事することになった。これが後にデジタルで作品を作るきっかけになったのだが、当時はこの会社に骨を埋めるつもりだった。ようやく「適職」にありつけたという充足感があったからだ。

しかし、会社の経営状態が劣悪で、最初の年の年収は五十万だった。三十八歳の時である。しかし「そのうちなんとか、なーるだろおー」と、植木等の無責任哲学に基づいて楽観視していたが事態は一向に好転せず、それどころか、そんな苦境時を狙ったかのように父親が亡くなり、葬儀の費用その他で百六十万ほど吹っ飛んでしまった。

葬式の全行程に必要な費用としては、決して高額ではないようなのだが、ろくに給料をもらっていないかった当時の私には壊滅的出費であった。しかも、参列者が気を遣わずに済むように「御香典は辞退させていただきますシステム」を採用したため出費を回収できなかった。

なんでもまた、よりによってこんな時に死ぬんや、おとうちゃん。なんで生前に「葬式は身内だけの密葬でよか。他人はせからしか」と言い残しといてくれんかったんやと、つい恨み言をいってしまった。ごめんね、おとうさん。

そして預金が底をつき始めたころ、このままこの会社と曾根崎心中するわけにはいかないが、かといって、ビジネスの才能のない自分には、適当な商売も思いつかないならば、一度は諦めたアートの稼働しかないじゃないか、こんどは画風をがらつと変えて、デジタルで描いてみようと思ひ、とにかく作品を作って、あるコンテストに応募したら、いきなり賞候補になった。その時四十歳。

しかし賞候補では一銭にもならないので、さらに別のコンテストに応募したら、優秀賞をもらって賞金が五十万円。金のない時に、これは神の慈悲としか思えなかった。そして翌年の、また別のコンテストでも入賞してニューヨーク旅行をさせてもらった。ホントはお金の方が助かったのであったが。

その後もいくつか賞をもらい、現在「デジタル・イメージ」という大規模なデジタル・クリエイターの集団に参加して、コンスタントに作品を発表する機会にも恵まれている。このように突然、制作が波に乗り始めたのは、デジタルに転向したことも無関係ではないだろうが、主に作風が変わった、つまり作品に対する考え方が、根本的に変わったからだ。

以前は、とにかく成功を焦っていたので、意表をついた作品や目立つ作品、入賞しやすいタイプの作品を作ることばかり考えていたが、四年近いブランクのおかげで頭が冷えた。ブランクは時間の浪費とは限らない。

自分の感性に忠実になれば個性的な創造への道も開けるのだ、そして結果的に他人の作品に似てしまったとしても仕方ないじゃん、と開き直れたのだ。

自分の感性に忠実になるとはどういうことか、説明するのは難しいが、誤解を恐れずにいうと「他人がどう思おうが気にせず、自分が面白いと思うものを好きなように表現しよう。色彩や構図に関する理論が邪魔なら無視してしまえ」ということなのだ。

『アウトサイダー・アート』（求龍堂）という画集には、知的障害や人格障害をかかえた人々の作品が満載されている。これらの作品は、作者が自分自身のために描いたものであり、発表を意図したものではない。彼らは他人の眼を気にする必要もなく「感性に忠実に」描いている。その結果、こんな発想どこから生まれてくるの、と思わずパクリたくなる作品であふれている。

個性的な作品とは意図してできるものではなく、結果的に生まれてくるものだ。発表なんかせず、自分のために描く、理解なんかされてたまるか、といったような気持ちで作った方が、大胆で個性的なものが生まれやすい。

カフカの小説があれほど特異なのは、作品の多くが発表を意図したものではなかったからではないだろうか。彼は友人に、自作の全てを焼き捨てるように遺言したそうである。結局、その遺言は守られなかったのであるが。

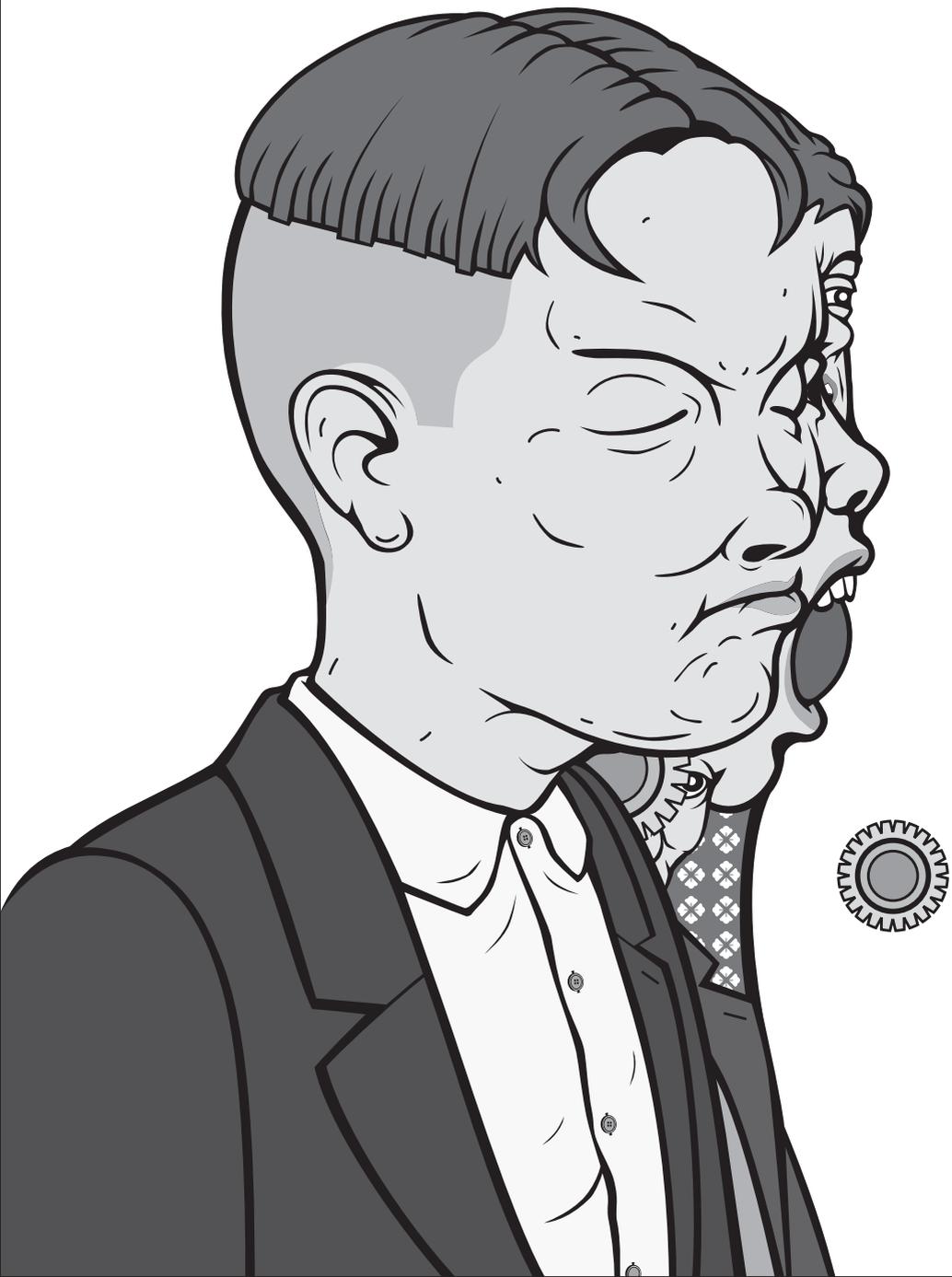
結局、アートをビジネスにすることはできなかったが、自分の感性や、やりがいをも最優先し、儲けを度外視することで、アートが自分の「天職」だということが分ったのである。実際、制作が順調な時は、生活の不安を忘れていられるのである。ええカッコして言っているのではない。ホントにそうなのだから仕方がない。とにかく制作することに生き甲斐を感じることができただから「天職」はアートに決めた。

収入は、「適職」だと自分で勝手に思っている講師の仕事で得ている。これも、財政危機のときに、タイミングよく知り合いが紹介してくれたもので、人と人とのつながりの大切さが身に滲みだ。非常勤なので収入は不安定だが、独身なのでなんとかなっている。

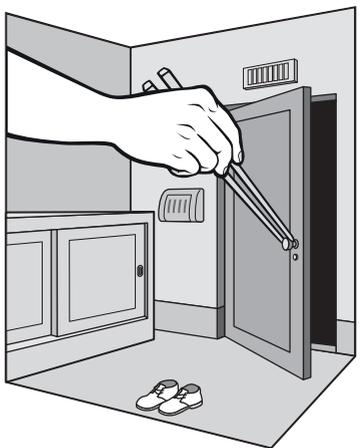
ゼーんぜん芽が出ないアーティストの方々、アートが自分の天職だと思うなら、三十代や四十代で諦めてはいけません。「その時」は五十代でやってくるかもしれないのです。仮に一生、芽が出なかったとしても「天職」という「生きる意味」を与えられたのですから、それ以上求めるのは、ピラフをおかずにしてご飯を食べるようなものです。

#### ● 強迫観念

高校卒業を目前にして、精神科医になろうか、売れない絵描きになろうか、ずいぶん迷った時期がある。結局、科学的思考の苦手な自分には精神科医は務まらないだろうと観念して、売れない絵描きになった。それから三十年ほど経つが、いまだに精神科医の世界には未練がある。私の絵が常に未練がましいのはそのためだ。



## なぜ日本人の名前は優れているのか



現代日本人の名前は、天皇家を除いて、基本的に姓と名に分かれている。姓は「苗字」または「名字」という別の言い方があるが、名は「名」としか言いようがなく、しかも姓と名の両方を意味することもあるので厄介きわまりない。

「名前は？」と聞かれて「永吉です」と答えると、「じゃ、下の名前は？」と聞かれる。こんな、幼稚園児を相手にするようなやりとりが大昔から続いているのだが、いまだに「下の名前」としか言いようがない。

国立国語研究所が発表した、外来語の日本語への言い換え例に「インフォームドコンセント」納得診療」なんて、病院のキャッチコピーかと思うようなものがあつたが、そんな活動をするヒマがあつたら「下の名前」をなんとかしてもらいたいものだ。

「苗」でも「吮」でも「衽」でもなんでもいい。由来なんかどうでもいいから「下の名前はなんですか？」ではなく「苗はなんですか？」と聞ける社会を創造することを、政治家はマニフェストで謳うべきである。

日本人の「姓」は非常にシステマティックな構造をもっている。例えば「中、川、田、村」といった、日本人の姓によく使われる漢字が四つあれば、十二通りもの名前がでさる。

中川、中田、中村、川中、川田、川村、田中、田川、田村、村中、村川、村田

このように、お好みに合わせて自由に組み合わせをお楽しみいただけるインターネットリア家具のような構造をもった名前は、日本以外では聞いたことがない（仮にそんな国が他にあつたとしても、ここでは存在しないことにする）。

他にも、野村・村野、山村・村山、田島・島田などのように、字を前後に入れ替えても姓になってしまう例がゴロゴロ出てくる。

かくいう私の「永吉」にも「吉永」という相方がいる。しかも、この相方の方が知名度が高い。だから知り合つて間がない人には、非常に頻繁に、しばしば&たびたび「吉永さん」と呼ばれる。永吉家の威光何処にありや。

ある美術コンテストの表彰式で「吉永克之殿」と呼ばれた時には、さすがに、その場で指摘してやろうと思つたが、そのコンテストを主催していた某テレビ局の美人アナが司会で参加していたのでやめた。

「なによ、ちよつと間違えたくらいでムキになつちやつてさ。スケールの小さい奴。あたし結婚するんだつたら、こんなケチな中年男、絶対にイヤだわ。もし言い寄つてきたら張り倒してやるんだから。いやらしい！」と嫌われたかつたからである。

それもこれも、みーんな吉永小百合のせいだ。諸悪の根源は吉永小百合である。もう過去の栄光に恋々とせず、本名の岡田小百合を名のつてほしいものだ。

また「永吉」は「安彦」「椿」のように、姓にも名にもなる、互換性のある数少ない名前であるが、それが災いして、よく「エイキチ」と呼ばれ、その後は「エイちゃん」

と呼ばれるようになった。いうまでもなく、矢沢永吉の愛称が「エイちゃん」だからである。ではなぜ「災い」なのかというと、私は矢沢君のようなタイプの人間が昔から苦手だからだ。

まあ想像してもらいたい。たまたま名前が同じというだけで、嫌いなタイプの有名な人の愛称で呼ばれることの屈辱、怒り、悲しみ、孤独、恐怖を。仮に、あなたが「浜田幸子」という名前で「ハマコー」と呼ばれたら、どんな気持ちがするだろうか。それもこれも、みんな矢沢永吉のせいだ。諸悪の根源は矢沢永吉である。

しかしながら日本人の「名」は世界一優れている。姓と同様、「宏和・和宏」「良信・信良」「五郎左衛門・門衛左郎五」などのような安直な組み合わせ構造をもっていることも関係があるが、非常にバラエティーに富んでいる。

多いのが、親が自分の憧れを押しつけたような名である。例えば、阪神タイガースの熱烈なファンだからというので、息子に「一虎」とか「大河」とかいった名をつけたりする。この子供は、一生涯、阪神タイガースかデトロイト・タイガース、起亜タイガース（韓国）もしくは北京タイガース（中国）を応援し続けることを運命づけられるのである。

また、今やベット化している女兒には「杏奈」「樹里」「婆阿薔薇」「丸刈太」など、横文字を漢字に置き換えた名をつけるケースが増えているようだが、これはいざれ男児にも波及するだろう。「江戸和土」「怒鳴奴」「事務」なんか出てきそうだが「山本事務」なんて変な名前の子供は嫌いだ。

その他、貧乏なのに、やたら子供ができて困るから末っ子に「トメ」とついたり、戦時中、日本の戦勝を願って「必勝（まさかつ）」とついたり、稼ぎ頭になりたいから

「稼頭央（かずお）」と改名したり、日本人は自由な発想で名前を考えることができる。創意工夫に富んだ国民なのである。

それに比べて、欧米人の名の貧相なことといったら哀れと言うほかない。例えばフランス映画のエンドロールを最後まで見ても、「ジャン」と「ピエール」と「フランソワーズ」しか出てこない。私は長い間フランス映画を観てきたが、これら以外の名前のフランス人を知らない。

フランスはまだいい。ロシアに至っては「イワン」しかないのである。文学作品を見ても分る。「イワンの馬鹿」「イワン・イリイチの死」「イワン・デニソビッチの一日」など、登場人物はみなイワンである。ロシア人は老若男女を問わず、全国民をあげてイワンという名前なのである。

もうひとつ、日本人の名の優れている点は時代を反映していることである。名を見れば、その人間の生まれが、現代なのか江戸時代なのか安土桃山時代なのかを知ることができるだけでなく、戦前なのか戦後なのか、天保の飢饉の前なのか、大塩平八郎の乱の後なのか、60年安保の最中なのか、まで分るのだ。

ところが、欧米人の体たらくはどうか。たとえば英国の「ジョン」「ヘンリー」「ウィリアム」といった名は中世よりも遙か以前からあるが、そんな原始人の名前を自分の子供につけて何の疑問も感じない欧米人は、かつての大英帝国やローマ帝国の亡霊に呪縛されていることを、むしろ誇っているかのようだ。

彼らは、名を聖書中の人物や聖人に因んでつけるという習慣に安住し、日本人のように、新しい個性をもった名を考え出すほどの創造性を喪失しているのだ。欧米人はもう進化しない。一年以内に絶滅するだろう。

## 私はこんな死者になりたい



また今年も、野球のペナントレース開幕と同時に葬式のシーズンが始まった。暖かい時期に死者を送り出そうというのは、ネアンデルタール人以来の伝統だ。

しかし私は冠婚葬祭に関わるのが著しく不得手だ。英語で言うところの「Daijiri」である。煩わしいというのもあるが、それ以上に、もろもろの、実をとまわらない儀式が無意味に思えてしかたがないのである。無意味なものは好きだが、面白さを伴わない無意味は無意味だ。

とはいえ、結婚式は祭りみたいなものだから無意味な儀式もけっこう。新郎新婦が喜んでくれるなら、そらぞらしい祝辞も言おう。家は真宗だが、チャペルで主イエスを称える賛美歌も歌おう。割りばしを鼻に突っ込んでドジョウすくいも踊ろう。酒が飲めるのだったら何だってやるうじやないか。

また、これは冠婚葬祭ではないが、大相撲で、勝った力士が懸賞を受け取る際、左右中の順序で手刀を切ることにどんな意味があるのか日本相撲協会のWebページを見たが判らない。お相撲さんも「なんで右中左じゃダメなんだろう」なんて追及はせ

ず、まーこういうもんでごんす、とわけもわからず手刀を切っているのだろうが、相撲は様式美の世界だから意味なんかどうでもいいのだ。

しかし葬式は少し違う。祭や国技や歌舞音曲のように、所作の意味が解らなくても楽しめるといえるものではない。

足の痺れや睡魔に耐えながら、さつぱり意味の解らないお経を延々と聞き続けていると、これがいったい何になるのだろうかという疑問で頭がいっぱいになる。自分の父親の葬儀のときですらそう思ったのだから、他人の葬儀なら、なおさらのことである。わざわざ金（香典）を払って不条理な苦痛に耐えることが、死者への手向けになるのだと自らに言い聞かせるしかあるまい。

また弔電も不条理だ。こういう内容にしなければ呪われるとも思っているのか、内容はだいたい「ご逝去の報に接し、心から哀悼の意を捧げます」といったようなものばかりで、弔電の一本も打つとかなきやまずいだろうという気持ちに手が取るように判る。

そんなもの、式でダラダラと読み上げられて、故人が喜ぶとはどうしても思えないのだ。弔電の差出人に各界の各名前が並んでいたとしても、せいぜい身内が「どうだこの人脈のすこさは。俺は、こんな偉い故人の娘婿の叔父のいとこの息子なんだ。恐れ入ったか」と自慢できるくらいのものである。

義理で出された弔電を義理で受取って、ありがたそうに読み上げる。不条理だ。本当に死者を悼む気持ちがあれば、弔電の文言は、在りし日の故人の性格や生活環境を反映した内容にしたいものである。

「健一、ひとりで逝ってしまったんだな。寂しがり屋のお前には耐えられないだろう。

俺も今すぐそっちに行くからな。もちろん、お前の奥さんと子供も連れていくから安心しろ」

魂の不滅を信じない人、つまり人間死んだらそれっきり、焼かれて一握の灰以外はなにも残らない、という考えを奉じておられる人にはナンセンスなことだろうが、自分が死んで霊になって、通夜や葬儀での人々の様子を見ているところを想像してみれば、すこしは死者の気持ちも理解できるかもしれない。

肉親が亡くなると、貧しくてもせめて死出の旅は飾ってやろうと、無理をしても人並みの葬式を出そうとするのが、人情というものである。しかし虎の子をほたいた葬儀が自分のために行なわれているのを見て「なんだこの貧相な葬式は。これじゃ近所の笑い者じゃないか。それに誰も泣いてないというのはどうのことだ。こら、俺サマの逝去を惜しめ」と、いまや霊となっても見栄にこだわり続けるなら、その人は当分の間、成仏できないだろう。このような、まがい物の死者は悪霊となって霊障をもたらすにちがいない。

「金もないのに葬式なんかするな。死んだ人間のために生きている人間の生活を犠牲にしてどうするんだ。まったく葬式なんてバカなことを始めたのはどこのどいつだ、ドイツ人か！」と訴えるのが、正しい死者のありかたである。

よい死者は、残された者に涙を求めたりはしない。未亡人となった妻が、畳を掻きむしって泣きわめきながら亡夫の面影を追いかけている姿より、前向きに「夫のことはもう忘れます。子供はうちが立派に育てますよってに、安っぽい同情は無用にしてくれやす」という毅然とした姿の方が、どれだけ死者を安心させることだろう。

それだけではない。真の死者なら、墓すら求めないはずである。墓地・埋葬等に関

する法律施行規則昭和二十三年厚生省令第二四号によると、遺体は火葬が義務付けられ、墓地以外の区域に埋葬してはいけないことになっているので、墓に入れるのは仕方がないが、何百万円もする墓に入れるのも、カマボコ板を墓標にしただけの墓に入れるのも、家族の世間体の問題で、死者にとっては全く同じことなのである。

しかし遺骨とは結局、カルシウムやコラーゲン、リンなどのかたまりが焼け残ったものだから、骨壺なんぞに入れて墓の中に貯蔵しておくなど愚行もはなはだしい。土に直接埋めて地球の栄養に還元され、草花や木々、あるいはミミズの体の一部になることこそ、真の死者が望むことなのである。